

相沢視点からの舞姫

①

僕は本論で『相沢視点からの舞姫』を書きました。このテーマにしようとした理由は、相沢の行動の意味を考えるためには、豊太郎の視点からよりも相沢視点からの方が考えやすいのではないかと思つたからです。

『舞姫』に登場する相沢の行動には不可解な点が多いです。大臣から豊太郎の真意を尋ねられたときの返答や、豊太郎が寝ているときに、わざわざエリスに豊太郎の祖国への帰国を伝えたりした時がそれにあたります。

僕はその理由を『相沢は豊太郎に恋心を抱いていたから』という点からアプローチしてみることにしました。そう考えてみることにし、相沢の不可解な行動に一応の説明ができたと思います。

相沢が豊太郎に恋心を抱いていた根拠は、

明らかに積極的過ぎる相沢の行動や言動、そして何より、エリスと豊太郎を離れさせようとするような提案を二度、三度と重ねていたことと、わざわざ豊太郎が寝ている時にエリスに豊太郎の祖国への帰国を伝え、根拠についてはもっと詳しく本論で書いた方が良いのはわかっているのですが、何分、本論では相沢視点からの一人称で語っているため、彼の行動の一つ一つに根拠や説明を加えていってしまおうと、その体裁が壊れてしまいます。そのため、根拠は少々、説明不足になってしまった、と自分でも思いますが、読み取ってもらえるようにはしたつもりです。

また、本論には舞姫本文にはない場面や、相沢の気持ちや書かれている箇所がいくつもあります。

しかし、本文に則り、不自然でない程度

の表現に留めたつもりです。

それでも本論を読んで、あれ？おかしい

な、と思った時には、おそらく僕の読解力

のなさで溢れんばかりの妄想力にその原因

はあります。

だから、そのようなところを見つけたと

きには、笑って読み飛ばしてください。

一応、本論は読んで楽しんでもらえるよ

うな内容にしたつもりです。読み終わった

後に少しでも面白かった、と思っていた

だければ幸いです。

②

我が同行の一人である豊太郎の凶報を聞

きて、新聞社の編集者を説き伏せ、彼を雇
つてもらえる約束をとりつけた。早速、彼
にそのことを伝え、本当に喜んでくれ
たのだろう、手紙を送ってきて、何度も何
度も感謝の言葉を重ねた。
札の言葉を手紙に見つける度に、仕事を
探してきて良かった、と思うと共に、自分
はこれから彼を見守ってやらねば、と思
うようになった。豊太郎との連絡が途絶え
てからもその思いは消えることなく、む
しろ、時間が経てば経つほどその思いは強
くなり、確信にも似た感情へと変わってい
った。
そんな折に、大臣から豊太郎を呼ぶよう
に、との命が下った。これを機に彼との会
話の場を設け、彼が進むに相応しき道を示
そうと思ひ立ち、すぐさま彼に手紙を送つ
た。
そして、彼がやってきた。久方ぶりに会
う彼の顔には生気がなく、やつれ果ててい

る ように 感じた。 会 うや 否や、 話し 合 いた
い という 衝 動 に 駆 ら れ た が、 ま ず は 大 臣 か
ら の 仕 事 を 終 わ ら せ ね ば な ら ぬ た め、 ろ く
な 会 話 も で き ず、 彼 は す ぐ さ ま 大 臣 の 室 へ
と 姿 を 消 し た。
彼 が 仕 事 を 終 え る ま で の 間 は、 本 当 に 時
間 は 進 ん で い る の か、 と 疑 い た く な る ほ ど
ゆ っ た り と 時 間 は 流 れ て い っ た。 そ う 感 じ
る ほ ど に、 友 と の 会 話 を 私 は 望 ん で い た の
だ ろ う。
久 遠 ほ ど の 長 さ に 感 じ ら れ た 時 間 を 経 て、
よ う や く 仕 事 を 終 え た 彼 を 食 事 に 誘 い 此 度
の 彼 の 状 況 に つ い て 詳 し い 話 を 聞 く に、 卑
し き 同 郷 人 に よ り エ リ ス と い う 踊 り 子 と の
恋 仲 を 邪 魔 さ れ た 上、 仕 事 ま で も 失 う こ と
に な っ た と 言 う。 話 を 聞 く 内 に、 ふ つ ふ つ
と 同 郷 人 に 対 す る 怒 り が 沸 き た つ と 共 に、
自 分 が 何 と か し な け れ ば、 と 思 う 使 命 に も
似 た 感 情 も 浮 か ん で き た。
あ ら か た 彼 の 身 の 上 話 を 聞 き 終 え た 時、

ふと時計を見て、驚くほど多大な時間を消費していたことによりやく気づく。
そこで当初の目的を思い出したが、エリスの話になると、少し浮かれたように、うれしそうに話す彼の姿見るに、おそろく私の忠告をまともに聞いてはくれないだろう。此度の彼の不幸は明らかに彼女の存在が原因となっていて。そのことを彼自身もわかっているのだろうが、本当に彼女のことを愛しているのだろう、わかりつつも離れられないでいるようだ。
しかし、彼が彼女を愛していることを理解した上で、私は彼に厳しいことを言わなければならぬのだ。それが彼のためになるのは間違いないはずだ。一応、彼も私の言っていることには不承不承ながらも承諾の意をとってくれた。
そこで、その日の会話は終わり、私たちは帰ることとなった。去り行く彼の背中を見つめると、彼には帰る家があるというこ

とを今更ながら実感する。そのことに気づくと、何故だか胸が締めつけられる思いがした。それから約一ヶ月の間はお互いに連絡をとりあうことはなかったが、その間に一度たりとも彼のことを忘れたことはない。彼と一緒に仕事をしよう、と思い提案したことは、だから当然の成り行きだったのだろう。この突然の提案に、彼は驚いていたようだが、すぐさま同意の返事をくれた。魯西亜に着いてからの彼の仕事ぶりは素晴らしかった。元からの才能もあつたのだろうが、やはり、エリスと離れたことが一番の要因のように思えてならない。実際、仕事をしている彼はエリスのことなど忘れているように見える。しばらくすると、大臣からの評価も上がりだしたので、口にははつきりと出さないけれど、いつそのまま一緒に祖国へ帰らないか、という思いを言葉の端々に加えて

いった。大臣には、彼がエリスとの関係を断とうとしていることは伝えてあるので、それが実現する日もそう遠くないように思えた。

そして新年になり、私たちはベルリンに向かい、到着するとしばらく別行動をとることとなったが、彼がエリスの所にいることは容易に想像がつく。そのことを考えるとな、せっかく魯西亜に連れて行った意味がなく、なつてしまふのではないかと不安になり、気が気でなかった。そう思ったのは大臣も同じであるらしく、本当に豊太郎は祖国に帰る気があるのか、と尋ねてきた。そこで、私はきっぱりと何の問題もないことを伝えると、早速、大臣は使いの者を彼の元へ向かわせた。

しばらくすると、使いの者から彼が承知したという知らせを聞く。彼が泣く泣くその選択をしたことは重々わかっているが、これでよかったのだ、と何度も何度も自分

に言ひ聞かせた。だが、彼が倒れたという知らせを聞き、その思いは一瞬で後悔へと変わった。彼はおそれ、しかし、今更あとには引けない。彼はおそれ、エリスに帰国のことを伝えてはいない。彼は、彼はそういう男だ。そこで私は彼のところに行き、彼の選択が間違いではないことをエリスに伝えることを決意した。彼が住む家に着き、病床に臥す彼を見たときには、さすがに決心が揺ぎ、自分を責め、もしたが、その横で必死に看病をするエリスを見た刹那、決心が再び固まるのを感じた。初めて見る彼女は幼い印象を受け、少女と言つても差し支えないほどの容姿をしていたが、豊太郎のことを本気で愛しているだろうことは、看病の様子を見れば容易に想像できた。その様子を見る限り、やはり、彼は彼女に何も伝えていないようだ。彼は、しかし、私は全てを彼女に教えた。彼が

私にあなたとの交際をやめる約束をしたこととを、祖国と一緒に帰ることを承諾したことを。話を聞き終えた彼女は呆然とし、その目は虚ろなものへと変わっていた。悪いことをしたとは思う。だが、彼のためを思えばこうするほかなかったのだ、と今度はそう自分に言い聞かせ、彼女の家を私は出て行った。しかし、何故だろうか。間違はなく、私は一人の少女にこれ以上ないほどの絶望を与えた。それにもかかわらず、私の心は不思議と満足感で満たされ、私の顔には知らず知らずの内に笑みが張りつき、はがれることがなかった。このときの出来事で、豊太郎は私を恨むようになった。そのことは良くわかっている。だが、恨まれていることを知りつつも、悦に入る心、確かに我が心根にあり。

③

今回のレポートを書くにあたり、風景描写や会話表現などの技法はなるべく使わないように気をつけました。その理由は、『舞姫』での相沢の出番が少なく、また、そのような技法を多用してしまうと、完璧な想像の域に入ってしまったからです。でも、結果として相沢の気持ちの部分はどうしても想像になっしまいました。一応、本文から推測できる程度の範囲で書いたつもりですが、後半に進むにつれて、文を面白くしよう、と少し過剰にしてみました。たかもしれません。

ですが、相沢の行動の意味は僕なりにには説明できたと思います。